

手紙

湘南白百合学園中学校 3年

ふるやま はるか
古山 遥

幼稚園に通っていた頃から書道を習っている。勉強とのバランスや級や段が上がるごとに難しくなり、何度も辞めてしまおうかと悩んできたが、出来る範囲でコツコツ通い続け、硬筆では去年最高段の検定に受かることができた。

ここまで成長できたのは、優しく、時に厳しく教えてくださった先生のおかげだ。先生はどんなことにも親身になって相談に乗ってくださる。学校のこと、勉強のこと、友達のこと、愛犬のこと…。中学校に入学し、部活や行事の関係で下校するのが遅くなり教室の閉室時間に間に合わないことがよくあるのだが、「遥のやりたい時に来ていいよ。」と言ってくださり、中学三年の今でも続けることができている。

今年に入ってから、新型コロナウイルスが世界中を襲った。日本でも四月に感染者数が増加し、緊急事態宣言・外出自粛要請が出された。学校が休校になり、様々な行事が中止・延期になった。生活の一部だった学校に行くということもできなくなり、大好きな友達にも会えない。テレビでは暗いニュースばかりだ。出口が見えない日常の中、一通の封筒が届いた。書道の先生からだった。教室で使っているテキストの最新号と一緒に、手紙が入っていた。先生は私が書道の成績がなかなか上がらず悩んでいたことが分かっていたようで、励ましの言葉が書いてあった。

「書道はもちろん他のことに対しても、遥の取り組む姿勢が好きだよ。」「今年はいろいろなことが起こりそうだけど、自分を磨きつつ楽しい未来へ突き進んでください。」

十一年間通い続けてきた間、「検定に受かる。段が上がる。」ことが全てだと思っていたけれど、先生の手紙を読んだ時、フッと心が軽くなり自然に涙があふれた。上を目指すことはもちろん大事だが、自分らしく少し力を抜いてもいいんだよと教えてくれたような気がした。ずっとつまらないと思っていた自粛期間だったが、やるべきこと、できることを考え、その都度自然に行動に移すことができた。これから先、勉強や将来のことや、人間関係など

に悩み、迷うことがたくさんあるだろう。そんな時は先生からの言葉を思い出して、自分らしく前に進んで行きたいと思う。

書道の先生とはメールで繋がっているが、思いがけずポストに届いた「手紙」というものにこんなにも励まされたのはなぜだろう。スマートフォンやパソコンでメッセージを送り合い、主語や述語もなく会話をするのが当たり前の今の社会。いち早く送り、読まれたかどうかを確認する効率重視の生活は、確かに便利だと思う。しかし、私は手で書く手紙が好きだ。文字や行間に書く者の息づかいや人となりを感じることができる。相手を思って便箋や封筒、貼る切手を選ぶことは楽しく、無事に届いてねとポストに投函するのにワクワクし、郵便受けに届く返事にドキドキする。そんな一連の行為が手紙には詰まっている。だからこそ私は先生からの手紙に何か温もりのようなものを感じたのではないだろうか。先生とはその後も手紙を数回やり取りし、とても楽しく良い刺激をたくさん頂いた。状差しにたまった先生からの手紙は私にとって大切な宝物になった。

小さい頃は友達に手紙を書くのが普通だった。拙い字で、足りない表現力で「ooちゃん大好き」と書いて、イラストを添える。それでも懸命に、相手を思って書いていた手紙だ。そんな自分も今では電子機器でメールを送ることが当たり前になっている。新型コロナウイルスは人を遠ざけ、物を遠ざけ、離れていることを推奨する。手紙のやり取りは避けるべきことの一つなのかも知れない。ならば今の不自由な生活が収束したらでもいい。文明の利器を使うことを一旦やめて、相手を思い浮かべながら手紙を書こう。何かのトラブルで消えてしまうかも知れない「データ」としての手紙ではなく、相手の心に優しくスッと入り込んでいつまでも残る「気持ち」としての手紙を。